



第1回 天井のない監獄、 ガザで続く攻撃



2018年2月、ガザ地区で訪れた国連機関が運営する学校で

「子どもたちは空爆の大音響や振動でパニックを起こします。大人たちは子どもにも、これは花火なんだ、パーティーなんだよ」と語りかけます。それぐらいしか、できることがないのです。何もできず、そのような光景を見ていることはとても苦しいことです」

パレスチナ自治区・ガザからそんなメッセージが届いたのは、昨年11月のことだった。イスラエル軍による侵襲が始まって以来、犠牲者は凄まじい勢いで増え続け、2万6千人、あるいはそれ以上の人命が奪われてきた。相当数の人々が、瓦礫に埋もれたままだ。

「10月7日、ガザを実行支配するイスラム組織ハマスがイスラエル市民を攻撃したことをきっかけに」——この間、ガザで起きてきたことは、そうした文脈で報じられることが多い。あらゆる不条理な死があつてはならないことを前提としながらも強調しなければならぬのは、事態はなにも昨年の10月7日、急に始まったのではないということだ。イスラエル政府による占領、封鎖という圧倒的な力の不均衡と不平等の構造の中、人々の生活が数十年に渡り踏みにじられ続け、ことガザに関してはここ16年ほど、「天井のない監獄」と呼ばれるほど、出入りや物の運

搬がますます厳しく制限されてきた。

尊厳のある生活が望めない状態を作り出してきたのは誰なのかに目を向けなければ、問題の本質は見えてこない。

友人の一人は、侵襲が始まった当時、長女を出産してまだ3週間ほどだった。彼女自身も過酷な環境だが、知人の男性は聴覚障害があり、この瞬間に何が起き、どこから攻撃の手が迫ってきているのか、その情報をうまくつかめず混乱しているという。空爆により多くの人々が手足を失い続けているが、麻酔は足りず、まともな医療環境などとはやない。友人から送られてきた動画には、叫びながら痛みを訴える小さな娘を、泣きながら抱きしめることしかできない父親の姿が映る。

ガザを訪れた2018年2月、私を迎え入れてくれた学校は、イスラエル兵たちの歓声とともに爆破された。もうたくさんだ。もうやめろ。今あげべき声はそれしかないはずだ。



安田菜津紀

認定NPO法人Dialogue for People フォトジャーナリスト。同団体の副代表。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。